

Kalnalgwa Haessal 칼날과 햇살

© 2003 by Kim Yong-man All rights reserved.

First published in Korea by Joongang M&B Publishers, Inc.

This Japanese language edition is published by arrangement with Yoonir
Agency, Seoul, Korea.

This book is published under the support of Literature Translation Institute of
Korea (LTI Korea).

目次

第一章	狂った少女	6
第二章	逮捕の論理と自首の論理	29
第三章	全き月明かり	69
第四章	見慣れぬ世界	111
第五章	踊りと祭儀	169
第六章	銀の懐剣	188
第七章	エスカレーター	220
第八章	新たな出会い	232
第九章	波よ、波よ	255
体験創造とその破壊を図る小説執筆	金容満	270
韓国を代表する実存主義作家・金容満	韓成禮	290

やいばと陽射し

第一章 狂った少女

1

ペ・ステさんが私の手を握って、おかしなことを言った。「俺は自首したんじゃないんだ。どうやって金日成首領様を裏切れるっていうんだ」だって。何のことかさっぱりわからない。

(一九九六年ごろに書いたものと推定)

ソウルに行つて、ドンホさんを探さなきゃ。別れてから三〇年が過ぎたけど、彼はいつでも私の夫だから。

(二〇〇一年ごろに書いたものと推定)

ドンホはヨンジュの手帳に書かれたメモを読み、この二つの内容に驚いた。一つは彼女がペ・ステと関係があったということであり、もう一つは自分を夫だと思っているという事実である。ある男

を夫だと幾度も意識すると、それが真実でなくても自分が本当の妻になったように思い込むように、ヨンジュは一種の自己暗示にかかっているのではないのだろうかと思つた。

車は、平昌ピョンチャンインターチェンジに近づいていた。ドンホはヨンジュの手帳を懐にしまいながら、運転手のパクにそのまますすぐ走るように指示した。パクは社長がいきなりそんな指示をするのを訝しく思ったのか、首をかしげた。平昌リゾートの建設現場に行くと言つてソウルを出発した社長が、なぜ何の説明もなくそのまますすぐ走れと言うのだろうか。

「平昌じゃなくて、どこに行かれるのですか」

「江陵カンヌンの方に向かつてくれ」

「何かあるのですか」

「人を探しに行くんだ。三十四年前に別れた人さ」

ドンホは何でもいいから無駄話をしたい気持ちだつた。そうでもしなければ、湧き上がってくる感情を抑えることができなかつた。

「だがな、うれしいというよりも何だか妙な気分なんだ。というのもその人はものを言うのがさつだから、いつもえらく気をつかうんだ。『俺がどうやって生きてきたのかなんて、なんで訊くんだ』といったようにな。こんなにくくぶく太つた俺を見たら、『昔のお前はどこへ行つたんだ』などと、きつとそんなふうな文句を言うだろう」

「何をしていらつしやる方なんでしょうか？」

「とつても恐ろしい拳銃使いだつた。今は年を取つたが、昔は韓国をぶるぶる震えあがらせた殺人兵器だつたんだ。彼らは現在の核爆弾よりも恐ろしい存在だつた。君、赤化統一という言葉聞いたこ

とがあるだろう」

「ええ」

「この頃、北朝鮮の核問題が世間の話題になってるが、あんなもんはサイバーゲームに過ぎないかも知れん。六者協議が開かれるっていうのは、関連した国同士の利害が入り乱れてるっていう話さ。それに比べて、彼らは韓国のおちこちで銃声を響かせたんだから」

「その人が今、江陵に住んでいるんですか」

「君は江陵から注文津の方に行ったことは？」

「何度か行ってみました」

「その道の途中に沙川サチンというところがあるだろう。面事務所ミシヨの所在地なんだが、派出所を過ぎて三〇メートルほど行くと、津里浦ジリポの方に曲がる道に出会う」

「ええ、知ってます。その道を下りていって港に辿り着くと坂が現れますが、右に曲がるとすぐに鏡浦台キョンプダエに出ますよね」

「よく知ってるな」

「友人とよく行ったんです。東海岸といえば、その辺りが一番気に入ってるんですよ」

「津里浦が気に入ったと言うのか」

「鏡浦台はつい分都会っぽくなっちゃいましたけど、津里はまだ田舎っぽい所が残っていて気に入ってるんです。思う存分騒いだって静かになりたい時だってありますから」

「そうはいつでも、津里浦は静かなところなんかじゃない」

「どうしてですか」

「幽霊の泣き声がうるさいんだ」

ドンホはすばやく話を中断して車窓を下ろし、顔に風を浴びせた。車窓から春の風が入り込んできた。久々に黄緑色の溪谷と稜線が親しく思えた。学生時代、ソウルを行き来するたびに舗装されていない国道を走りながら見た五月の山野も、同じように黄緑色だった。

車はいつの間にか珍富ジンブを過ぎていた。間もなく大関嶺テクアルゴンを越えるだろうと思うと、ドンホはすぐにまた新しい思いになった。先程までの落ち着かない感じとはまったく異なった、何かしつとりとした気分であった。心の中に思い描いてきた大関嶺——それは絶えず太古の苔の生す原始の峠であった。そして、大関嶺を覆った苔は、ある時は鬱蒼とした松林、ある時は霞んだ霧の塊、またある時は溪谷を染める赤い陽射しとなるのだった。

2

ドンホが瑞草警察署ソチョでヨンジユの手帳を受け取ったのは、出勤前の時間だった。家の前に待機していた車に乗ろうとした瞬間、備え付けのカー電話が鳴った。受話器からは丁寧な声が聞こえてきた。行き倒れの身元を確認してほしいので瑞草警察署の刑事課に来てもらいたい、という要請であった。ドンホは運転手のパクに、会社に行く前に瑞草警察署に寄るように言った。警察署は自宅の近くにあった。

「お忙しいのに申し訳ありません」

担当刑事はドンホに礼儀正しく挨拶をしてから薄っぺらな書類綴じを見せ、表紙に貼られた女性の

顔写真を見せた。それは明らかにナ・ヨンジュの顔だった。細い顎とスツと筋の通った鼻、そして涼し気な目は昔と変わったところはなかった。ドンホは刑事に、彼女について思い出す通りに話した。彼女が若いころ精神異常気味であったということも付け加えた。

刑事は写真の女性の身元が確認されると、ようやくドンホを呼び出した理由を説明し始めた。昨晩、地下鉄教大駅で五十代後半と見える女性がプラットホームで倒れているとの通報があつて現場に向かつたのだが、所持品から簪一つと一冊の古い手帳が出てきたという。その手の平ほどの小さな手帳にカン・ドンホという名が幾度も記されているというのだ。

「身元を確認させていただいたんですが、社長さんは元警察官だつていうじゃないですか。一九八六年にソウル警察庁を退職されて、現在はアシン建設代表でいらっしゃるんですね」

「それで命には別状はないんですか」

ドンホは刑事の言葉を聞き流し、真つ先にヨンジュの健康状態を尋ねた。ひと月ほどの入院が必要だという医師の所見を刑事は教えてくれ、ヨンジュを歩き倒れとして処理しようかどうかと決めかねているとも言った。

「私がこの女性の身柄を引き受けましょう」

ドンホの口から断固とした語調の言葉が飛び出した。ヨンジュを歩き倒れとして放置するなんて到底できない、という責任感が瞬間的に生じたのだ。路上で倒れるほどこの自分を探すのに疲れた女、そんな女性をこれまでこの世に存在していかないかのように忘れていたことへの罪悪感を深く感じて、ドンホはまるで自分に言い聞かせるように、身柄を預かると幾度も繰り返し返した。

「身柄をお預かりになれば、お立場が悪くなると思いますが」

「立場が悪くなるって？」

「もしかしてペ・ステンテ氏をご存知ですか」

「ペ・ステンテ？」

「社長さんが江陵署に勤務されていた頃に扱っていた人物ですよ」

「本当ですか。それならもしかしたらあの人物かも知れない。蔚珍^{ウルチン}・三陟^{サムチョク}事件のころに潜入したあの

……？」

「そうです。北からの南派武装スパイの……」

「彼をどうして知ってるんですか」

刑事はにっこりとするだけだった。ドンホは気がもめて、ペ・ステンテは今どこにいるのかと、思わずせきたてるように尋ねた。すると刑事は、それほど気になる人物なら、なぜ今まで探さずに放っておいたのかと問い返した。その通りだった。決意さえすればすでに会っていたらうに、なぜ今まで探してもせずにすっかり忘れて暮らしてきたのか。

「それなら、ナ・ヨンジュ氏とペ・ステンテ氏が同居していたこともご存知ではなかったのですね」

佳境に入るといのはまさにこんなことなのだろう。ドンホは、何かに取りつかれているような気分になった。ヨンジュとペ・ステンテが出会って、男と女の関係になったとは……。刑事は笑いを含んだままドンホの表情を窺って、机の引き出しから一冊の古びた手帳を取り出した。そうか、そこに彼の話した内容が書かれているのか。

「はじめはつまらない落書きだと思いませんでした。あちこち書き散らしてあって、それに字だつて丁寧じゃないですしね。あらかた目は通したんですが、メモの最後にペ・ステンテという名が出て

きて、どうもおかしな内容が記されているんですよ」

「おかしな内容というのは？」

「お読みになればわかりますよ」

刑事は手帳を黄土色の封筒に入れてドンホに渡すと、いっしょに事務室の外に出るように促した。ヨンジュの入院している病院は警察署の向かい側にあった。

先立って横断歩道を渡り、病院の方に歩いていった刑事は、直ちに玄関のドアを開けてエレベーターに向かつて突き進んだ。ドンホは、すぐにヨンジュに会うことになるのかと思うと足が震えた。エレベーターに乗って五階で降りた二人は、数人の患者の横たわる病室に入ってゆき、ゆっくりと窓際のベッドへ近づいて行った。窓際のベッドには、女性の患者が目を閉じたまま仰向けになって眠っていた。一見すると死んでいるようにも見えた。これがヨンジュの姿だなんて……。写真とは異なつて、顔や手は今も垢が付いたように汚れて見え、路上をさまよっていた痕跡が見て取れた。ドンホはベッドのそばに近寄つてそつとその手を握つた。すると彼女はゆっくりと目を開いた。しかしドンホを見ても、誰なのかわからないようであつた。言葉もなくしばらくドンホの顔を眺めていたヨンジュは、急に体を動かさうとした。刑事が彼女を落ち着かせて、ドンホが誰か分かるのかと訊くと、静かに頷いた。ドンホはヨンジュの手を握つたまま、呆然として立ち尽くしていた。言うべき言葉がみつからないのだつた。

刑事は公式の確認手続きはすべて終わったとしても言うように、部屋を出ていった。ドンホは病室を出て、真つ先に彼女を一人部屋に移す手続きを済ませた。一刻も早く一人部屋に移して、清潔な環境を整えてやりたいと思つたのだ。

手続きを済ませて外に出ると、玄関に立っていた刑事は握手を求めてきた。ドンホは刑事の労をねぎらった。そして車に乗って、すぐに渡された封筒から手帳を取り出そうとした。すると封筒の底にある何か他の物がドンホの指に触れたので一度封筒から手を抜いた。ドンホはもしかしたらと思つてもう一度すばやく封筒に手を入れた。

それは簪であり、間違ひなくドンホの母の遺品であつた。母が結婚したときに差して嫁に來たその宝玉の簪には、まだ母の手垢がついているようだった。ドンホは両手で簪を握りしめて母の面影を思いつつ、静かに簪を頬に当てた。母が亡くなる頃にヨンジュに渡した母の真心……。数十年過ぎた今もなお、ヨンジュは自分がドンホの母の嫁であつたことの証しとして、御守りのように大事にしてきたに違ひない。

ドンホがヨンジュにはじめて会つたのは、彼女の心の病がもっとも著しいときであつた。注文津の道端で太ももをさらけ出し、まるで向日葵が太陽を見ているかのようにポーっと座つていた一七、一八ほどに見える狂つた少女。ドンホの目にヨンジュは道端に捨てられた廃品のように見えた。誰も見向きもしないそんなヨンジュを家に連れてきて世話をしやつたのが、ほかならぬドンホの母であつた。

「高校一年のときに妊娠して、自分の父親に刃物で刺されたせいで頭がおかしくなつてしまつたつて言うのよ。だけど本当に刃物で刺されたのかどうかはよくわからないの。だつてヨンジュの体にはどこにも刺された跡がないんだから。たぶん刃物で殴りつける振りをした父親の行動に気が動転しておかしくなつたに違ひないよ。いくら屠殺屋だつていつたつて、牛を殺すみたいに自分の娘に本気で刃

物を振りかざす父親なんているわけないよ。優しい父親だったから娘の行く末を案じて、怒りと悲しみのあまり死んでしまったのよ。母親なしでやつとの思いで育ててきたのに、こんなふうに頭がおかしくなっちゃって、本当に気の毒だったよ」

「高校生が恋愛して子どもまでできたっていうんだから、不良娘だったんだね」

「そうじゃないの。好きな相手との子どもじゃなくて強姦されたのよ。ともかく、行くあてもない子を誰が面倒見てあげるの？ ちゃんと世話をしなればすぐによくなるよ」

ドンホはそんな頭のおかしな少女を家に置くことについては抵抗があったが、一人で寂しく暮らす母に、心の拠りどころのような存在ができたのは幸いだと思った。村の中学校で教鞭をとっていた母は、退職後に父が亡くなってからは一人でさびしく暮らしていたからだだった。

そしてその後、ドンホが再びヨンジュと会ったのは二年後のことだった。ソウルで大学に通っていたドンホは帰省せずにいて卒業式を終えてから故郷に戻ったのだが、久しぶりに会ったヨンジュは見違えるほどになっていた。言葉こそやや不自由ではあったが、意志表示ははっきりしており、感情の起伏もなめらかになっていた。家の中も母が一人で暮らしていた頃よりもずっと片付いており、雰囲気も明るくなったようだった。

「あとひと月もすれば、うちの庭は花畑になるわ。松葉ボタン、鳳仙花、タンポポ、全部ヨンジュが植えたのよ。お前が戻ってくるからっていつて、ヨンジュがどれほどきれいにしたか分からないわ。身なりにだってずいぶん気を使ったんだから」

ヨンジュは顔を赤らめて台所に逃げていった。母が笑いながら台所に向かって声を上げた。

「うちのヨンジュのような娘はそんじょそこらにはいないわよ。一生ヨンジュと二人で暮らすつもり

よ。かわいし、性格だつていいし、嫁にするには最高じゃない。ソウルの若い子たちはどこか小賢しいから嫌なのよ」

母さんはこんな風にヨンジュを癒していたんだ……。

ドンホは母を信頼しながらも、一方でそんなふうにヨンジュをずい分おだてているのが心配でもあった。そんなに露骨に褒めちぎっても、もし何か失望させたりしたら、ヨンジュの病気がまた悪化するのとはわかりきつたことだった。そんなドンホの心配に気付いたのか、母は真顔になってドンホの肩をトントンと叩いた。

「お前はヨンジュを無視してるようだけど、あの娘（むすめ）のような娘はめつたにいないよ。もう病気もすっかりよくなつたし、こちら辺りではめつたにお目にかかれない娘よ」

「いったい何の話だよ。あの娘を好きになれつてこと？」

「そんなことじゃなくて、優しくしてあげてつてこと。聞いた話によれば、ヨンジュの家はもともとはいい家柄だつたつてこと。お祖父さんが独立運動をして、散り散りバラバラになつたんだつて。ヨンジュの父親だつてもとは屠殺屋じゃなくて、お祖父さんが亡くなつて家がつぶれたから屠殺屋が連れていって家族にしたのよ。ヨンジュがいくら普通じゃないつていつても、どこか良い家柄の面影があると思つてたわ。もつともそんなことは大したことじゃないけれどね。屠殺屋の血筋だからつて何なの、使いどころのない血筋だからつて何なのよ。どこの誰であれ、大事なのは人柄。家柄なんてどうだつていいのよ」

その夜、ドンホは月の光の明るく照らす庭の隅に立ち、ヨンジュの姿をずっと眺めていた。露のしずくのような澄んだ面立ちとすらりとした容姿が、月明かりでさらに引き立って見えた。彼女の用意

した夕食もまた、品のある才女が作ったように垢抜けして見えた。夕食には、ヨンジュはドンホが好きなのやしの和え物や豆腐の煮物を彼の前に並べてくれたが、その真心も彼女の長く白い指のように美しく見えた。

ヨンジュの病気は本当によくなったのか。

ドンホは頭の中で努めて彼女の美しい姿だけを思い浮かべていた。先ほど床に座るときにちらっと見えたスカートのなかの白い太もも、はち切れんばかりの胸元がドンホの股間を熱くした。ドンホは母に内緒でヨンジュを呼び出すことにした。ドンホはあらかじめ家を抜けだして、松の木が何本か並んでいる裏山の窪地の方へゆっくりと歩いて行った。そこは幼いときによく駆けまわって遊んだ草原だった。松の木はずいぶんと年を取ったように見えた。ドンホは松の木にもたれて、月の光を映し出す海を眺めた。そのときだった。丘の下の方から人の気配がするなと思ったら、月の光を背に歩いてくる白いワンピース姿のヨンジュが見えた。月の光に照らされた白いワンピースが翡翠色のように光っていた。

「ワンピースがきれいだね。ヨンジュも白が好きなんだね」

そばに近づいてきたヨンジュに、ドンホが先ず声をかけた。

「これ、ドンホさんが買ってくれたのよ。すっかり忘れてしまったみたいね」

ヨンジュが手を口にやりながら笑った。ああ、そうだった！ 照れくさくなったドンホはとっさにヨンジュの手を握った。母の世話をよくしてくれていることへの感謝を込めて、去年の春にソウルから送ったものだったのだが、すっかり忘れていたのだった。

「他人行儀に名前なんて呼ぶなよ。これからは兄さんと呼んでくれ」

「そんなことできるわけないわ」

突然、ヨンジュの表情が険しくなった。決してわざとというわけではなく、それとはまったく違う何か切羽詰まった表情であった。ドンホは兄妹以上の関係を望む彼女の気持ちに気付かないふりをしたまま、ヨンジュを抱きしめて乾いた草むらに寝転んだ。月の光に照らされた彼女の体が霧のようにゆらめいていた。

体が離れると、ドンホはヨンジュをそのままにして急に立ち上がった。ヨンジュを抱きしめたという事実を実感した途端、ドンホの頭の中で彼女はかつて村の道端で日向ぼっこしていた狂った少女の姿と重なったのだ。塀にもたれかかったままで座り、自分のスカートの中に手を入れていじりまわしているヨンジュの我を忘れた昔の姿。ドンホはまるで自分の体にヨンジュの垢が付いたかのように感じて、彼女を置き去りにしたまま小川の方に向かって走り去った。

3

車から降りたドンホは海辺に立てられた「入り江の刺身屋」という立看板をしばらく眺めた後、鎮守の山の方へ視線を移した。……思い出した。山裾の道を海に沿って回っていくとやや低い場所に出るのだが、その中腹に葬式のときに使う喪屋があったはずだ。その喪屋では、明け方になるといつも死んだ者の靈魂が物悲しく泣く声をするのだ。波の音が岩に反響して生じた音をそう感じるだけなのだろうが、その陰鬱な声に当惑した漁師たちはその近くに家を作るのを嫌がるという。たしか忠清道チュンチョン道から東海岸まで流れてきた二人のよそ者が喪屋の近くに粗末な藁屋を作って住んでいたはず

だ。しかし、それも武装ゲリラ事件の翌年に火事で燃えてしまった。当時は、死霊が火を付けたとか、そこに住んでいた二人が火を付けて逃げたのだとか囁かれたものだ。

「疲れたらろうから江陵で宿を探して休みなさい」

そばに立って社長の様子を気にかけていたパク運転手にドンホは声を掛けたが、彼は夜更けに車が必要になることもあるかもしれないのでこの近くで泊まると礼をわきまえて答えた。しかしドンホは、自分はここで夜を明かすから車は必要ないと言って、パクを江陵に送った。そしてドンホは、すぐに鎮守の山の方へ歩いていった。

山裾に沿って砂利道が続いていて、その道の下の方では波が碎けるように岩に打ち寄せていた。

カモメたちの戯れる島の曲がり角を回ると、突き当たりに真つ赤なトタン屋根が現れた。人の気配はなく、風の音がするだけだった。その家は、日差しまでも風に飛ばされて、まるで大きなゴミのようには舞っていた。セメントの壁に書かれたヒラメ、石ダイ、イカ、海鮮アラ鍋、刺身の盛り合わせといった文字も、塗料がはがれてシミのように褪せてしまっていた。ドンホは立ち止まって、刺身屋の裏手の丘の上に一つポツンと建てられた倉庫に目を移した。それは一五坪ほどと思われる小さなブロッコ小屋だった。ヨンジュは、そのスレート葺きの小屋を「倉庫部屋」と手帳に書いていた。倉庫を改良して新婚の住まいにしたというその「部屋」。よりによって喪屋のあった場所で新婚生活を始めるとは……。

そんなことを考えながらドンホは刺身屋の前庭に入ってしまった。おそらくここが忠清道からやってきたよそ者たちが住んでいた場所だったのであろう。庭は静まりかえっていた。主人を呼んだが返事はなく、ドンホはもう一度「ごめんください」と呼んでみた。するとようやく裏の方から人の気配がし

て、小ざつぱりとした中年女性がエプロンで手を拭きながら出てきた。

「避暑シーズンじゃないので、お客さんも少なくてね」

その女性は客がいなことが何か悪いことでもあるかのように申し訳なさそうな表情を浮かべて、聞いてもないことに返事をした。

「いや、そうじゃなくて……ペ・ステンテさんを訪ねてきたのですが」

すると、女性の表情はたちまち強^{こわ}ばった。彼女は倉庫部屋の方を指差しながら声をひそめた。

「どこからお越しになったのですか」

「ソウルからです」

「どのような御用ですか。ご親戚ではないでしょうし、もっとも親戚なんていない人ですから」

「友人です。年は私のはるかに下なんです」

「お友達ですか。あの人、友人もあまりいらっしやらないでしょうに……。もしかして噂はお聞きになつたんですか」

「何をですか。ステンテさんに何かあつたんですか」

「まだご存知じゃないのですね。奥さんが家を出て行った後、ちよつと気が抜けたみたいになつてしまつて。商売もすぐにやめてしまつて……。それでお会いになつてもおつらいだけだと思いますよ」

「では、この店は？」

「店は去年、私が買い取りました。はじめは堤防の入り口あたりで商売してたんですが、ソウルの人たちはここのようにちよつと奥まつたところが好きなんです」

「あなたはこちらの方ではないようすが」

「私は寧越ヨンウオル生まれです」

「ペ・スンテさんの奥さんのことはご存じですか」

ドンホはもつとも気になっていたところを問うた。家を出て行った妻というならヨンジュに間違いないだろうが、ペ・スンテに会う前にも少し詳しい話を知りたかったのだ。

出て行った妻の話を始めながら、女性はドンホを板の間に案内した。たくしあげていた袖をおろしながらさっさと歩いていくその後姿は、商売経験の豊かさを物語っていた。

「はじめはうちの店で働いていた女性だったんですけどね、話に脈略がなくて、いつもハマばかりしてましたよ。器なんかもしょっちゅう割るしね。たしかにちよつと変だったんですけど、心持ちは優しくよく働かし、長いこといましたよ」

それではヨンジュは病気が再発したのか。家を出て行った後でそうなったのかと思うとドンホは胸が傷んだ。ヨンジュと兄妹として過ごすだけでも彼女の心は平穏だっただろうし、ましてや一生あてもなく彷徨うようなこともなかっただろうに……。

「奥さんがここにはじめてきたのはいつぐらいのことでしょうか？」

ドンホは女性にヨンジュが津里浦にやってきた時期を尋ねた。

「七年ぐらい前だったかしら。その後でペ・スンテさんがここに家を建てて店を始めて……。それで奥さんが出て行ったあとは、うちが引き継いだんですよ」

「ペ・スンテさんといっしょに暮らしていたころの奥さんの様子はどうでしたか」

「そうねえ。いっしょに暮らすようになってからは気持ちも明るくなって、家事も良かったようでしたよ。隣近所でも大変評判良かったんですよ。そのあと何年か過ぎたころかしら。ちよつと様子がま

たおかしくなりはじめて……。結局、夜逃げしちゃったのよ。そのあと、ペ・ステンテさんが家に引きこもるようになって、何カ月かしてやっと外に出たと思ったら、その時分からおかしなことをするようになったんですよ」

「おかしなことって？」

「孫のような子どもたちと交じって鎮守の山で腹這いになりながら兵隊ごっこなんかしていましたよ。どこから持ってきたのか軍服まで用意して。そうそう、軍服じゃなくて人民軍の格好だったわ。それでお巡りさんに捕まえられたんだけど、老人だからって目をつぶってあげたそうだけどね」

「人民軍の服装ですか。そんな服を着て子どもたちと悪ふざけしてたんですか」

「悪ふざけというより、いたって真剣でしたよ。兵隊ごっこをするときの目つきなんてほんとに怖ろしかったんですから。ま、とにかく、これくらいおわかりになればあの人にお会いになるのにも問題はないでしょう」

「もう一つだけお聞きしてもよろしいですか。ペ・ステンテさんはここに来る前にはどこに住んでいたんですか」

「ソウルにいたそうよ。もともとは浦項ポグムにもいたっていうし」

「どうしてここに来たんですよう」

「そんなことは私たちにもよく分かりませんよ」

女性はこの辺で席をはずそうとした。彼女にとっては何の得にもならない話であり、はやく抜け出したいという表情がありありと見て取れた。

ドンホは店を出て倉庫部屋の方へ早足で歩いていった。三〇メートル余り歩くと石段があり、そこ

を五、六段上がると庭があつた。庭の端の方に餅をこねる板のような平べったい石が置かれていて、塀の下には赤いツツジが植えられたこぢんまりした花壇があつた。ヨンジュが育てたのかもしれないという気がして、その花壇に何となく親しみを覚えた。ドンホは花壇の横を通り過ぎて小屋に近付いていった。入り口の前には一足の古い運動靴が置かれていた。

ドンホがやや低い声で誰かいるのかと問うと、中から「誰だ」という返事がした。意外にも柔らかな声だった。ペ・スンテさんに会いにきたのだと丁寧に答えると、咳ばらいが二、三回聞こえたあと、すぐに戸が開いた。さきほどの柔らかな声とは違って、その視線はドンホの体を素早くなめるように這い回つた。間違いない。たしかにペ・スンテだ。

「私が誰だかわかりませんか」

ドンホが顔を突き出すと、戸の敷居に近づいた彼はその顔をじつと見つめた。まばたきをしきりにしているのを見ると、どうやら目の焦点が合わないらしい。焦点が合えば誰なのかすぐにわかるはずなのに、ドンホはもどかしく思った。殺人の専門家も歳月に飲まれてしまったとは……。死んでもどぎつい殺気を放つような人間だったのだが。

「僕です、僕。昔、情報担当の刑事だったカンですよ」

「カン刑事？ うゝん……」

しばらくドンホの顔を見つめていたペ・スンテは、いきなり素足で飛び出してきてドンホの手を握つた。正気のように見えたので安心はしたが、それでも警戒心を緩めることはできなかった。手を握つて喜ぶペ・スンテに、ドンホは何も言えないままで立っていた。彼を両手で抱き締めたい気持ちにかられながらも、体は言うことを聞かなかつた。ドンホのそんな用心深さを嗅ぎ取つたかのように、

[著者]

金容満 (キム・ヨンマン)

1940年、韓国忠清南道扶餘生まれ。釜山中学校、龍山高等学校を経て光州大学文芸創作科を卒業し、慶熙大学大学院国文学科博士課程を修了した。1989年、現代文学に『銀の懐刀』を発表して文壇デビューした。短編小説集『君は僕の花嫁だ』、『妻が包丁を取った』があり、長編小説『やいばと陽射し』、『人間の時間』、『春川屋のノンスの母親』、『母の仮想の空間』、『狂った愛』(全四巻)、『残児』など多数の作品がある。その他、散文集として『川端康成の眠りと僕の戯言』、『隨筆の新しい秩序模索』(全二巻)、詩論集『金容満小説家の詩の読み方』、紀行エッセイ集『世界文学館紀行』などがある。短編小説『君は僕の花嫁だ』がKBSの一幕物としてドラマ化され、『春川屋のノンスの母親』が、KBSラジオで連続ドラマ化された。長編小説『やいばと陽射し』が東仁文学賞審査作品に選定され、長編小説『残児』で2017年に韓国文学賞を受賞し、慶熙文学賞、国際ペン文学賞、晩牛文学賞、柳承圭文学賞、仏教文学賞、農民文学大賞、東アジア文学賞など、多数の文学賞を受賞した。京畿大学国文科とソウル文化芸術大学文芸創作科招聘教授、読書新聞論説委員を歴任し、現在、デジタルソウル文化芸術大学の招聘教授、残児文学博物館の館長、韓国文人協会展示文化振興委員会の委員長、国際ペンクラブ韓国支部の理事、詩を愛する文化人協議会の理事などとして活動している。

[監訳]

韓成禮 (ハン・ソンレ)

1955年、韓国全羅北道井邑生まれ。世宗大学日語日文学科及び同大学政策科学大学院国際地域学科日本専攻修士卒業。1986年、『詩と意識』新人賞受賞で文壇デビュー。1994年、許蘭雪軒文学賞受賞。詩集に『実験室の美人』『柿色のチマ裾の空は』『光のドラマ』などがある。鄭浩承詩集『ソウルのイエス』、金基澤詩集『針穴の中の嵐』、文貞姫詩集『今、バラを摘め』ほか、多数の日本語翻訳詩集と、辻井喬『彷徨の季節の中で』、村上龍『限りなく透明に近いブルー』、宮沢賢治『銀河鉄道の夜』、丸山健二『月に泣く』、東野圭吾『白銀ジャック』ほか、多数の韓国語翻訳書がある。現在、世宗サイバー大学兼任教授。

[訳者]

金津日出美 (かなづ・ひでみ)

1968年生。立命館大学文学部日本史学専攻卒業、大阪大学大学院日本学専攻博士後期課程修了、博士(文学)。韓国・新羅大学校日語教育科専任講師を経て、現在、高麗大学校日語日文学科副教授。著作に、『性と権力関係の歴史』(共著、青木書店、2004)、『現代韓国民主主義の新展開』(共編、御茶の水書房、2008)、『「東亜医学」と帝国の学知—「提携・連携」と侵略のはざままで』、『日本学報』第90輯(韓国日本学会、2012)など。